

モンハンの世界にレッズ
クウザとして転生する
らしい

きまぐれ無補正野郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

事故で死んでしまった少年がレックウザになってのんびりとモンハンの世界を旅する物語

※きまぐれ更新、テンプレが嫌な方はブラウザバックした方がいいです。それでも良い方はどうぞ

目次

設定章（そもそも章じゃ）ないです。

設定 ————— 1

本編

転生までのながれ ————— 6

状況確認 ————— 9

特訓 ————— 13

ハンターに見つかる ————— 18

睡眠爆破とかいうMH界の闇 ————— 24

一度あることは二度ある ————— 30

不思議な飴万能説 ————— 38

【悲報】この世界の不思議な飴、あんま

り万能じゃない説 ————— 46

53 脳内思考がオーバーフロー(?)

設定章 (そもそも章じゃ) ないです。

設定

佐藤 翔 17歳

トラックにはねられて死んでしまった男

神様へのお願いでレックウザに転生する

他の3つの願いは『いつでもメガシンカできる体』『レベルの上限はない』『食べたものの能力を自分のものにできる』

レベル上限がないので何処までも強くなれます、チートですね。

補食したものの能力を吸収できる。他作品でもよく見かける能力、いわゆるテンプレートですね。

少し説明

補食したものの能力を吸収できるのでリオレウスを補食したら火属性を使えるようになり耐性も手に入れる事ができます。それは生き物に限らず植物でも同じ、アオキノコだったら傷の回復速度が早くなったりカクサンの実だったらブレスなどが空中で散らばるとか(ポケモンというとはじけるほのお)です。キノコ達はキノコ大好きの効果

にのっとりします。ニトロダケだったら力が強くなる。

翔レックウザ

レベルアップをすると身長が伸びる。最終的には一般飛竜種位の大きくなる。人間だつてレベルが上がれば（歳をとれば）大きくなりますし。（無理矢理感）

レックウザが覚える全ての技を使えます。追加効果などもそのまま、例：はかいこうせんは撃つてから10秒ほど動けない

※3話（特訓）でライゼクスを食べたため電気技を少しと雷耐性を手に入れた。例でんじほう取得

色違い

産まれた場所を龍結晶の地の結晶の中にした理由はワールドやれば分かるんですけど、死んだ古龍のエネルギーがこの場所に集まって結晶が出来るって設定。結晶の中から産まれるっていうのはゼノ・ジーヴァがいたんで結晶の中で育つたみたいなのがあり得ると思ひまして。要するにパクリですはい。そして食べてはいませんが古龍のエネルギーでできた結晶の中にいたので死んだ古龍のエネルギーから能力を吸収しつつ結晶の中で育つたみたいなの、古龍観測隊とかハンターたちも補食して能力吸収というのを結晶中でも行っていたのを解釈できると思つたからです。だからかえんほうしややれいび、たつまきなど、色々な属性攻撃を使う事が出来る事を古龍のエネルギーから吸収し

ていたと考えることも不思議ではないと思っただけです。色々属性が体にあるから黒いんだとかいうのもありそう。

W だからなんなんだ、元から覚えるからいいだろそんなこと、みたいな感じですけどね

色々な属性、黒い、天候も変えることができる、あれ…？

念のため

モンハンの世界といってもモンハンというゲームの世界では無いです。なのでゲームのモーションも勿論オリジナルのモーションも書いたりします。例えば3話（特訓）に出てきた獯猛ライゼクスのトサカブレードとか地面から電撃の剣とか…電撃の剣ってのも可笑しな話ですけどね

※この小説では一部の技の効果が変更されています。

例：じしん　じしんという技を使うことは出来ないが疑似的に使う事は可能。しかしダメージはない。

??? 男

ハンター。最近のバルファルクの行動が異常なためそのことを調べるため色々な場所まわって痕跡をあつめているプロハン様。生まれつきモンスタの言葉を理解でき

る。ろくな友達がない。メロンが好物

???
女

ハンター。レックウザに驚いて逃げたあいつ。普段は臆病な性格だが装備を身に付けると簡単には死なないためか調子にのる。不意打ちにはめっぽう弱い。プロハン様のお友達。常識人ではある。うざい性格

不思議な飴

ポケモンのゲームにあるアイテム。ポケモンに与えるとその場で次のレベルに上げるための経験値を取得できる。この小説では食べると傷を塞ぐために細胞を活性化させ早く直す、わかりやすくいうとヒロアカのリカバリーガールとかいう奴。(あいまいなのは友達から聞いただけだから)そして食べた後に経験値を取得すると1レベル上がるための経験値を取得できる。

例：経験値1000ゲット↓レベルアップ↓不思議な飴の効果発動↓1レベル上がるための経験値ゲット

例：経験値1000ゲット↓次のレベルまで残り経験値1↓不思議な飴の効果発動↓

本編

転生までのながれ

「やあ、こんにちは。突然だけど君はモンハンの世界に転生することになったよ。」
『はっ。』

俺は佐藤 翔、今日の前で意味の分からないことを言われてるんだがどうやらおれは死んでしまったらしい。

「ん？なにか分からない事でもあるのかい？私は神だ。知りたい事なんでも教えよう。」

翔『神様なんですか…じゃあなんで俺死んだんですか？』

神様「君、トラツクに跳ねられたんだよ。君の死体がグチャグチャでね、見ていられなかつたよ。ところで転生の話なんだけど…」

翔『転生はしないと駄目なんですか…』

神様「上の方からの命令だからね、そこに紙とペンがあるだろ？そこに書いてある通りに従ってくれ。」

翔「はあ…」

俺は成仏しなかったけどこの流れだと拒否権はないと思う。あんまり人に従うの好

きじやないんだけどなあ…

翔『何々？』

この紙は転生する者が転生したらなりたい生き物、どんな要望でも3つまでなら叶えてくれる転生するための用紙です。因みにこの紙がないと転生できません。

翔『へえ、なんにでもなれるのか。なら小さい頃から好きだったポケモンのレックウザにもなれるのか？』

神様「勿論なれるさ。人間のままだでもいいしミラボレアスとか超大型モンスターにだってなれる。微生物にだってな。」

翔『んじや、どうせなら色違いのレックウザで』

口では冷静にいつてるつもりだが内心めっちゃはしゃいでる。だって自分の好きなレックウザになれるんだぜ!?!みんなだって好きなモンスターになれたら嬉しいくない？俺はこの通り嬉しい。

翔『あ、そうだ。この場合モンハンの世界にモンスターボールとかって作られるとかありますか？』

神「あーないない、安心しろ。おもいつきり羽のばせるから」

やったぜ。流石神様。転生者は自由にやってけるんですね！従うのはすきじやないって言ったけど神様なら従っても良さそうだな

翔『よっしじやあ願いの方は、1. いつでもメガシンカできる体 2. レベルの上限はない 3. 食べたものの能力を自分のものにできる?』

神様「終わったか?」

翔『はい! 終わりました!』

神様「えつと、さとう かけるでいいのかな?」

翔『さとう しょうです。』

神様「分かった。では初期レベルは60だ。モンハンで言うとG級のイヤンクックだな。レベル100でG級ウカムルバス位の強さだ。レベル上げの方法はどうする?」

翔『ポケモン同様に敵を倒して上げていく感じがいいです。』

神様「質問は以上だ。転生準備はできた。ではまた」

翔『はい。またいつか会いましょう』

▼目の前が真っ白になった

状況確認

そういえば目が覚めたらたまごから孵化するのか成体からなのか聞かれなかったけどどうなんだろう。初期レベル60だし成体だとは思う。

『……………』

目が覚めた。それはいいんだけど体が動かない。目の前は白く光ってる。まだ転生途中か？もう少し待ってみよう

～10分後～

『……………』

～20分後～

『……………』

～1時間後～

『……………』

いやいやいやいや待っておかしいでしょ!?なんでこんなたつてんに転生できてないの!?!…あれ?良く考えればなんで時間を感じとれてるんだ?

ピシッ

あ。

ピシッピシッピシバリント

『きりゆりりゆりしいい！（もう既に転生してたじゃねえか！）』

体は動かしづらいとかは特にないな、なんか色々と疲れた。なにがともあれたまごから産まれたなら体は狭いが動かせる。けど俺は動かせなかった。一体なから…氷？とりあえず探索してここが何処なのかを把握しないと。

そうして俺は空を飛んだ。見渡す限りがらす氷みたいな結晶が散らばっている。奥の方は火山みたいだ。

なるほど、ここは龍結晶の地か。俺はゼノ・シーヴァだった？結晶を鏡がわりにして自分を見れるかな？

結晶には黒い手が可愛い龍が飛んでる様子が見えるな

よっしゃ！レッククウザだ！まずはどれぐらい強いのかしりたいな…何かいい実験台
いないかな？

「グオアアアア！ガンツガンツ」

『きゅっ…（うるせえ！いきなりなんだよ！誰だよ！…主任か…いい相手が見つかったな、いくぞっ！）』

まずは俺も、ハイパーボイスだ！

『きゆるるりりりりりしい！』

「グオツ」

よし！怯んだな。ハイパーボイスは分かりやすく言うとティガの咆哮だ。ガンキンも結構近くに居たからダメージは大きいはず、このまま攻める！

しんそく！

「グオツ」

バキッ

『きゆりあつ……（いつてえ！）』

まじかよ、しんそくのタイミングに合わせて顎振り落としてきたぞ……油断してしまった、これはIQ2億。まさかとは思うがG級个体か？それなら見切られても納得はいく。でも初戦がG級个体は流石にきついな。「グオアアアア！」っ！

ここはしんそくを使って一旦逃げた方が良いな……

『きりゆっ！（しんそく！逃げるんだよ〜！）』

「グア!?グオアアアア！」

俺が逃げるとは思わなかったみたい、逃げるなって言われてる気がする。でも逃げます。死のRTAなんてやるつもりはないです。

Now Loading…

痛い。俺はさつき空で何かに激突して森と丘に墜落しました。あーあー忘れよ忘れよ。今は強くなるためにも頑張らないとすぐ狩られちゃう…レベル60はG級イヤンクツク位だっけか。今は技豊富なイヤンクツク状態。早く強くならなくちな。そしてウラガンキンと決着をつける！

特訓

古龍観測隊より

先日、今まで見たことのない謎の龍が空を飛んでいました。しかし同じく空を飛んでいたバルファルクに激突し落とされてしまったようです。ギルドへ

ギルドより

了解した。こちらではバルファルクの狩猟依頼を出しておく、そちらは謎の龍の調査を進めていただきたい。古龍観測隊へ

古龍観測隊より

了解です。調査を続けます。ギルドへ

俺は今エリア10にいる。で、前回いった通り俺は強くなるために頑張る。強くなるためにはまずメガシンカの特訓をしよう。いくらいつでもメガシンカ出来る体にもなったとしてもなれていないと力を制御できない。最悪暴走すると思う。で特訓：と思ってたけど、レックウザってメガシンカすると天候かえちゃうんだよね、そんなと

ここを古龍観測隊とかにみられたら即討伐とか充分ありえる。だからレベルが良い感じになるまではメガシンカはなしだ。まあそういう訳だからモンスターを探す。

く翔レック移動中く

ここはエリア4、ここならランポスとかいるし地道にレベル上げれるからね
「キシャアアアアアア！」

で、この煩い奴はライゼクス。これでまたG級相当の強さだったら泣く自信あるわ。
しかもめっちゃやかいかいし俺が小さいだけか？

ライゼクスの弱点は氷、だったら…

『きりゆあああ！（喰らえれいとうビーム！）』

「キッ」

「キュシャアアアア！」

翼を振り上げたか、お手なら余裕で回避できるぜ！

『きりゆっ!!』

あつぶねえ！なんだあのお手の速度!?!ん？あの黒いもやもやはもしや寧猛化!?!

お手した地面が黒焦げになってやがる…しんそくがなかったら死んでた。体格差があつて相手の攻撃の当たる範囲が広く見える…もっかい怯め！れいとうビーム！

「キツ キュルシヤアアア！」

怯んでも一瞬だけか…だったら…ん？

「キシヤアアアアアア！」

今度は頭に黒い霧を纏つたのか、なにしてくるんだ？

「キツシヤアアアアアアア！」

はあ!?嘘だろ…獰猛化の力を使つてんのか？トサカから電気の剣が出来てるじゃねえか！青電主かよ!?

「キュシヤツ！」

ドツカアアアン

あぶねえ…地面が割れてる…相当なげもんだなおい…

チツ、このままいけば俺は確実に負ける。このままれいとうビームでも撃つてたらそのすきにあんなゼクスカリバー食らわされたらやばい。ここは獰猛化部位に連続で攻撃を叩き込んで倒すしかない。

『きゆるるりあああ！（喰らえしんそく！）』

「キュルアツ…！」

怯んだな、もう一度ツしんそく！

「ギユアアッ！」

流石肉質が軟化する獯猛化部位、めっちゃ手応えあるな、このまま攻める！

「キシヤアアアアアア！」

よし尻尾振りには効かないぜ!!しんそく！

「キアアッ！」

からのゼロ距離れいとうビーム！

「キッ……」

まだ立つのか……しぶとい奴め……だがこれで終わりだ！しんそく！

「キュシヤアアアア！」

『きりゅあ……（かはっ……）』

はあ……はあ……地面から電気の柱が……うぐ……直撃したかつ……でもいつ仕掛けてたんだ

?……!まさか尻尾振りの直後!?

「キシヤアアアアアアアア！」

チッ、やるしかねえ!しんそく!

ビリビリビリビリドッゴオオオ

よめてるぜ!今のしんそくはお前の攻撃を避けるためのしんそくだ!俺の切り札喰

らえ！はかいこうせん！！

「キツ！キユシヤアアア……ア……」

頭に命中した！これは流石にやっただろ！？

「……」

『きりゆりりゆりしいい！（いよつしやあ！勝ったあ！

ふう、こいつ強すぎだろ、このライゼクスくえば電気技手に入るし最高の気分だ！）』

く翔食事中く

ゼクスは残さずきつちりと完食したぜ。

後日そこらのハンターから聞こえた話、あのライゼクスは上位の個体だったらしい。上位であれって獰猛化って恐ろしいなおい。

ハンターに見つかる

デーレ、デエーン

これまでのモンハンの世界にレックウザとして転生するらしいは

テテテ テテテ テテテ（ry

仮面ライダーディケイドの前回のあらすじってすごく言いづらいね。

前回は獯猛化ライゼクスと戦い無事勝利した。そして翔は獯猛化の恐ろしさを知ることとなった

で、本題に入るけどこの前倒したあの獯猛化したライゼクスを食べたことで発電気管が進化して雷耐性も手に入れました！でんじほうやらいげきも使えるようになって負ける気がしねえ。それと尻尾の先端が少し尖っててそこから電撃をはったり剣も作りだせるみたい。

そしてレベルは63になりました！やったぜ。

…どうやってレベルが分かるのかって？自分でも説明しにくいけどレベルアップすると脳内に直接！伝わってくる感じがしてすね…

すいません嘘です。

レベルを自分では確認出来ないらしいんですよ。

でも強くなった感覚はあるので確実に上がってます。

あんなやつとの思いで倒したのにレベルが上がってなかったとかあつたら流石に辛い

さつてと、試しにあの岩を電撃で攻撃してみようつと

『きりやあ！（ライトニングブレード！）』

「ガアアアアアアアアッ!？」

え。イビルさん!? 岩じゃなかったんかい

G級でも獐猛化でももうこうごりだぜ、一旦逃げる!

Now Loading…

ふいー。ここ巢（他モンスター）まで来れば一安心だな。

さああいつをどうやって倒すかだなええつと…今音がしたな…

ん？

「……………」

あ。

「ツ!?新種のモンスター!?!」

ドーモ、ハンター=サン

「ええ!?やばいでしょう!えつとえつと…」

これ俺狩られるやつですかね…そうされないそうにまずは敵意がないことを伝えよう

「ハア!?こつちくんなよ!これでもくらえつ!」閃光玉^{ほーい}

『ぎゅああああ!（うわっ!眩しすぎる!目が痛い!）』

「い、今のうちにっ」

……………あー目の前が真っ白だー。

あのハンター絶対するさねえ…よく見てないから覚えてないから分からんけど

あいつ逃げたらなにするつもりだよほんと、ギルドに報告するのはマジでやめてほしいんだがなあ

なんて思ってるうちに目が機能再開してきてるよ。

この後はイビルジョーいたし勝てる気がしないから森と丘からでるっかな

ほんじやいk「きやあああああああああああ」この声はさつきのハンターか?…:エ
リア4の方向から聞こえる、行ってみよう

Now Loading…

「きもい!やだ!来んな!こっち来んな!」

イビルジョーだったら最悪だ、急がないと…もしイビルに喰われたなんて事があつた
ら

さつきの復讐出来なくなっちまうっ!

よし!エリア4に着いた!

ってイビルもハンターも居なくね?他のエリアにいったのか?

「ぎゃあああああ！むしやだあああああああ！」

イビルさんあなたむしって呼ばれてるの？まじかよ…
方向的にエリア2に居るのかな？行ってみよう。

「ブナハブラしねよ！キモいよ！うわあああ！」

『きりゆりりゆりしいい！（出てこいイビルジョーオオ……ブナハブラ？）』

まじかよ…ほんとにただの虫じゃねえか…

「うわっ！さっきの奴じゃん！もう来ちゃったの!？」

…（あ、そうだ…モドリ玉で！）」

さあて俺の痛み、お前にも「じゃあねーバイバーイ」

は？おい！ちよつて…

行きやがった…やべえ、このまま他のハンター達に俺の存在知られてとんでもないことになるよ…はやく森と丘から出よう。出発！はあつ！

そーういやあのイビルはなんだったんだ？

翔レックウザLv62

新取得技：らいげき、でんじほう、プラズマシヤワー

睡眠爆破とかいうMH界の闇

「ここが龍結晶の地か！すごく綺麗だなあ」

「そうか、探索しにきただけだから適当に走り回ってこい、モンスターがいたらモドリ玉
使えよな」

「了解！」

「？あれ、可笑しいな」

「確か前ここに来たときはこの結晶は崩れていなかった…はず」

「モンスターの攻撃で砕け散ったのか？」

「導蟲が反応している。」

…緑、青とどちらも反応しているがこれは一体？

「痕跡だよな？だとしたらこの痕跡を残したモンスター種族が分からないのか。これ
は持つていくか。」

やばい。とてつもなくやばい。

あの人間に逃げられてから眠れなくなつた。別に他の人間達が来たとかじゃないけどいつくるか分からないから怖い。

やっぱりここ森と丘からは離れた方がいいな。

…今は夜だし誰も来ないでしょ…

おやすみ。

N o w L o a d i n g . . .

「なあ、この未知の竜の調査ってクエストなんだ？」

未知の竜の調査

依頼人：ギルドマスター

森丘にまだ見ぬ謎のモンスターが現れたという報告があった。そのモンスターを調査してほしい。討伐ではない調査だ。調査の結果によつて今後のそのモンスターへの対応をしていく。

契約金

50000z

報酬金

500000z

「ああそれか。なんか最近新たに見つかったモンスターが居るらしくてさ（あの結晶と何か関係があるかも知れない）」

「えっ!? まじかなんだよそれ!? 行こうぜ! それで討伐しようぜ。これで俺らはもつと有名になつて最後は英雄だ!」

「そんなこと言うんだつたら俺は行かないぞ、ちゃんと依頼内容読めよ。もしかしたら温厚な性格かも知れないだろ?」

「なんだよ、モンスターが温厚な訳ないだろ! お前が来ないなら後3人集めて有名になつちゃうもんねーだ!」

「…」

ふあー…

良く寝た……あれ？なんかあるな、邪魔だからどかさつと

その瞬間森丘全体に爆音が響きわたった

『ぎゅあああああー（痛い痛い痛いっ！）』

ハンター1「よっしゃ！大樽爆弾G8つ一斉爆破作戦成功！」

ハンター2（後ハンターはHで）「かなりダメージは入ってるはずだ！畳み掛けるぞ

！」

H1、3、4「オオー!!」

H1「お前を討伐して俺らが英雄になるんだ！」

!?寝起きで状況が良くわかんないけどハンターが襲ってきたのは分かった！ヤベー

イ！

一旦水の中に！

H3「あ！水に入りやがったぞ！」

H 2 「はっ俺は弓だぞ、水の中に逃げても無駄だあ！」

水の中でも竜星群だせっかな？おら

H 4 「がっ…」

H 1 「いつてえ！」

H 3 「なんだこrぐがつ」

H 2 「【力尽きました】」

H 4 「ふぎけんじゃねえ！出てきやがれクソモンスターー！」

モンハンやってるとき睡眠（途中）爆破楽しんでたけどやられるとうぜえわ。じゃあ
返り討ちにしてやりましょうかね（できるか分からんけど）

『きりゆりりゆりしいい！（初手咆哮安定）』

H 1 「ぐわあー！」

H 3 「【力尽きました】」

H 4 「うるせえっ」

回復する隙を与えない糞モンスになってやる。アイアンテール！

で地面を思いつきり叩いて疑似じしん！

H 1 「立てない！くそ！ふぎけんな！」

H 4 「早く水から出てきやがれっ！」

じゃあお言葉に甘えて…バシャーンはかいこうせん！

『ぎゅりやあああああ！（4ねえええ！）』

H1「やめルオオ！ク【力尽きました】」

H4「お前それ反則【力尽きました】」

はあ…つかれた…起きたばっかなのに、畜生

このハンター死んではないのか。俺も火力まだまだかなあ…
すまんもういつぺん寝るわ、今度は狭いけどエリア11で

H1を倒した！H2を倒した！H3を倒した！H4を倒した！
レベルが63に上がった！

一度あることは二度ある

毒属性ほしいな

よし、お引越ししよう。

いや、空の旅は本当に最高ですよ

「キユイイイイイ」

ん？

『ぎああああ！（いだあ！）』

デジャヴかあ？なにこの感じ

Now Loading...

意識は失わなかった。だけどぶつかってきた奴の姿が見えなかった：

つてかここどこよ、森と丘から旅たつて少ししかたつてないのに落とされたから自然豊かなマツブかな？

そういうやぶつかられた後そのまま衝突魔に引っ掛かって良くわからんところまで来てもうたがな。

周りまっしろで視界が狭くなってる。

雪山かなここは？……そうだとしたら早速死にそうです。ドラゴンひこうにはきついです。お、そうだ（唐突）ウルクススだ！あいつを食べれば防寒できるんじゃないか？ついでに爪も鋭くなると思う。よし探そう

「オオナツチの討伐依頼が出たけどさ、森丘にいるんでしょ？」

「ああそうだ。」

「それやばくない？だって噂の体細い癖に結構強いやつが乱入してきたらさすがの私も無理よ？況してや私とあんた二人だけって馬鹿なの？」

「…人が集まらなかつたんだから仕方ないだろ、一応その噂の竜のために閃光玉とこやし玉を持ってきたんだ。エリアを移動しなかつたら…」

「…策考えとこ」

雪山にしては寒くないけどどこどこ？視界が遮られてて上も下もわからないんだけど…竜生ツンダツンダ？

…とりあえずりゆうのはどうで壁があるか確認しよ…

「ニャー！なにするニャー！」

「まずいニャー！殺されるニャー！」

「ブラックドラゴン！ヤベーイ！」

何々殺されるって！物騒だな！誰が殺しにかかってくんのか！威嚇のはかいこうせん
でぶっ飛ばす！

「ニ〃ヤー！」

「逃げルオオ！」

「誰ニヤ！煙玉焚いとけばなんとかなるっていたのは！」

「あいまいすぎるニ〃ヤー！」

あ、視界が戻ってきた

「まずいニヤ、このままでは我々の住処が壊されてしまうニヤ！」

「秘技！穴を掘るニヤ！」

「あ！お前は戦闘班じゃないかニヤ！」

「うわあ！完全にこつちを殺そうとしてるニヤ！」

「もうだめニヤ：おしまいニヤ：」

…すまん。はかいこうせんぶっぱなしてすまん。

「グオオオオア！」

『ぎっつ！』

ええ！？誰！

「次はイビルジョーかニヤー！」

「なんで今日はこうもモンスターがいつぱいくるんだニヤー！」
イビルジョーかよお！俺もまだ死にたくない！くらえ雷イ！

「！」

「なんの音…」

「まさかオオナツチと噂の竜が戦っているのか？」

「ええ…どうすんのよこれ」

「とりあえずいくぞっ」

「…はあ…」

「ガアアアアアア！」

よしよし雷属性が苦手なイビルなら電気タイプの技は効果パツグン！もういつちよくらえ雷！

「グオア！」

よければんかーい。だったらゲーム内では必中のでんげきはだ！

「グオ？」

・・・それも避けるのかよ：

ゲーム内で必中なだけでした。だけどそれはこっちも同じ。イビルジョー、お前の攻撃はおれには当たらないぜ！「理由体が小さく攻撃範囲に入りにくい」

「グツガアアアアアア！」

「ニャー。地獄ニャ。あいつらは地獄揺さぶっておる。」

「揺れているのは地面ですがニャ」

「さつきから何よこの地震…」

「オオナヅチは戦ってここまで揺らすのか？」

「流石にそれはないでしょ」

「なら噂の竜か？」

「ありそう。この前バカなハンター集団が地面揺らされて動けないところをやられたつて。」

「…」

「何？」

「…」

「何黙ってんの？」

「… 後ろ」

「え」

「キュル」

「キエアアアアアアアアアア！」

「…お前叫び過ぎだろ、喉ぶっ壊れるぞ」

L レ
V ッ
6 ク
3 ウ
ザ

不思議な飴万能説

ウゾダドンドコドーン！

「グオオオアアアア…ア？」

「キュ」

「ええ？なにこれは」

「……………」

今のこの状況をありのまま話すぜ！

俺がイビルジョーと交戦中にアイルーが逃げたんだ。

そしたら霧が強くなっていきなりオオナツチがとびだしてきた。これには俺もイビルジョーも困惑、そして俺らを狩りに来たであろうハンターがきてしまった！

ざけんな

このオオナツチがただのオオナツチだったらよかったんだがどうも賢くてな…

回も戦ったことないから分からんけど。霧を出すと同時に毒も霧に混ぜて出すからスタミナやらなんやらめつちやハードモードにされてます。

「おいこれを着けておけ」

「ん？お、さんきゅー」

いいなあガスマスク。なんでここに持ってきてると思っただけどオオナツチ対策だろう。そらそっか、目的のモンスターの対策しないでどうすんだっての。

呑気に話しているが時間としては1秒もないのでご安心を
霧のはらしかたが分からない俺、適当に技をうつ

うおら！大文字！

「うわあ!?!あつっ!」

「む、あの黒くて細い龍が攻撃してきたようだな。我々に牙をむいたということは」
あ、やべえ

「では貴様も敵とみなす、噂の龍とや」
「グオオオオオオオアアア！」
セリフ潰さないで」

「イビルジョーとオオナツチはあたしに任せて！」

「任せたぞ」

「!?目の前が真っ白になった

「閃光玉は最強なのだよ」

「何もみえねえ！」

「グッ!?」

「おーナイスウー！」

「閃光玉大好き」

「ええ…」

「イツツツツこいつ何かでつついてきて痛え！こいつランスか!?

「何も見えないけど風ぎ払いりゆうのはどう！」

「!?くつ、私のスキルにはガ性2があるのだがここまで退けぞるか…だが！」

「やっぱりランスか…今ガ性2でもものけぞるって言ったか、だったら連続で撃って動

けなくして…」

「爆弾です」

「は？ドツカーンっあああ!!!」

「休む暇は与えない！狩技スクリユースラストオ！」

「うっそ狩技ってこの世界にもあるのかよ…」

『ぎゅあああああああ』

「よし、きいている！このまま攻める！」

痛スギイ！まずいつ、ここは大文字でやけどさせ…ぐふつ

「どうやらオオナツチがまいた毒霧にやられているようだな！」

完全に忘れてた…

『きりゆい…』

痛みすら感じねえぞ畜生…俺の竜生もここで終わりなのか…

『き…』

『……………』

動けない。体が言うことをきかない。

「……………絶命したか。」

「噂の竜はそこまで強くなかったようだな」

「やるねえ！やっぱあたしのダチだね！ほら終わって早々悪いけどこっちにも加勢して

！」

「ああ」

..... 目が覚めた。ここはいつたい？見渡す限り真っ白な空間..... あ
るえ？

「久しぶりだな翔よ」

また神様のじつちやんだ。なんだ夢か

「おいなに勝手に夢と決めつけている」

『え？夢じゃないんですか？』

「ああ、夢などではない。」

『ということは俺死んだんですか？』

「いや、死んではいないぞ。ただ生と死の境にいる状態だ」

『...』

「そこでだ、そんな死にそんな君に素晴らしい物をあげよう」

『素晴らしい物？なにそれ』

「不思議な飴だ」

不思議な飴。それは食べるだけでレベルが1上がる不思議な飴。

だけどその不思議な飴を食べてこの状況がどうにかなるのか？

「お前さんはゲームの中の設定しかしらんようだな。不思議な飴は傷が塞がって体力も

全回復するのだよ。そしてレベルも1上がる代物だ」

『そう……なんですか』

なにそれ凄すぎない？ そんなものあるなら最初の願いで頼んどけば良かったかもしれない。

「ああ、そうとも。分かったならそれを食ってあちらの世界に戻れ」

そして俺は飴を口に入れて意識をうしなつた

言ってしまった。一度言いたかったこと。

「任せて！」と。モンスターを一匹を任せてならまだいい。だけどあたしは「イビルジョーとオオナツチは任せて！」

やってしまった。二匹同時に相手できるわけがないのに。

と、思っていた時期があたしにもありました。

あたしのダチが閃光玉を投げた。

「グオツ!!」

「キュル!!」

え? 霧はどうしたかって? あの黒い竜がブレスうってきたお陰で少しはれた。そこに投げ込んできたため効果はある。でもいつもよりは光が弱いけど

こやし玉の存在を忘れていたあたしは怯んでいる隙にあたしはイビルジョーにこやし玉を投げつけた。

「グツア!?!グオオオオオオオ!」

臭すぎたのか逃げて行つた。

「さーてとオオナツチさんお相手願いま... あれ?」

見失つちやつた☆きも

ドン痛っ!

「【秘薬が盗まりました】」

は? なんで? ふざけてんの?

「噂の龍はそこまで強くなかつたようだな。」

あつちは終わつたみたい。なので早速呼びました。

「やるねえ! やつぱあたしのダチだね! ほら終わつて早々悪いけどこつちにも加勢して

【悲報】この世界の不思議な飴、あんまり万能じゃない説

「ふいー… オオナツチ討伐完了つと」

「中々てこずったな」

「そうね、先読みされまくって怖かったわよ。エスパーかなにかなのかしら？」

「オオナツチはエスパードラゴンだった？」

「… アプトノス台車くるまで寝るねー…」

「この湿った場所で寝るのか…」

「あの竜も運んでもらおつか」

『…』

やあ、俺だ翔だ… おかしいなー不思議な飴で傷なおったははずなんだけどなー体がうごかないなー

なんで？

でも体に痛みを感じられない。感覚麻痺しているような状態でもなくただ痛みを感

じない。だけど体が動かない。まあ時間たてば動けるか

「にいちやんとねえちゃんあんたら本当にすげえな！あの今までの個体より手強いモンスター、しかも古龍種まで狩っちゃうんだもんなあ！」

「オオナツチは毒を対策さえすれば後はチクチクつつくだけだ」

「zzzz」

「そうなのか？それはそうとその蛇みたいな奴はなんだ？」

「ああこいつは…最近発見された新種のモンスターのはずだ」

「おいおい、いいのか？新種なのに狩っても」

「大丈夫だとは思う、これでこのモンスターの調査も進むだろうしな」

「それもそうだな」

「さてと武器の手入れしなければ…」

「……………なあにいちちゃん。」

「？なんだ？」

「いまさつきまで此処等は雲一つない快晴だったんだ。」

「はあ…」

「いきなり曇るのは可笑しくないか？」

「クシャルダオラだったりするかもな」

「それってやばくねえか？」

「龍属性の武器で顔殴れば死ぬから心配ない」

「ふん、化け物め」

『い……』

ウケツケジョー「クエストクリアおめでとうございます！報酬金をお受け取り下さい！オオナツチの素材は明日受け取りにきて下さいね！あ、後この竜に関してなんですけど素材を渡せるのはかなり先になってしまいかもしれませんが大丈夫ですか？」

「問題ない、調査に役立ててくれ。それでは」

「んー… ついたー？…」

「起きるのが遅い、もうとつくに報酬金を受け取っているぞ。ほれ半分」

「おーありがとー」

「…」

ガタガタゴットンズタンズタンガタガタゴットンズタンズタン
気づけば俺は台車の上に鎖でしばられていた。

え… なにこの縛りプレイは／＼

ふざけましたすいません。あ、もう動けるみたいです

「おお！これがあの黒い竜か！」

「みたいですね、やはりあの二人にかかれば余裕なんですかね」

「ここは誰？ 私はドコ？」

「討伐は控えてほしかったがまあいいだろう。まず外殻から調べようか」

「太刀もつてきまーす！」

え？ 今なんと？

「太刀で斬れるか？切れ味は一番鋭いやで頼む！…斬れるのか？」

「まずいゾ〜これ。」

「んん、んん…」

「鎖溶かそう。」

「しかしこのモンスターは何処に生息していたのだろうか…」

「太刀もつてきましたー！（今更だけど短剣の方が良かったかもしれない）」

「はやかっただな」

「よしよし順調。ちよつと威力強くしよ」

「さつき一人でなに呟いてたんですか？」

「ああ、このモンスターの元の生息地について考えていたんだ。口に出ていたか」

「ジャリ」

「え？」

「と、討伐されたのではなかったのか!？」

『ぎゅあ！（威嚇）』

「ひい！」

「そうだ！ハンターを読んでこい早く！」

「お、なにこのクエスト」「えーなにになに?」「雑魚だろどうせ」

緊急依頼

あるハンターたちによって討伐された筈のあの謎のモンスターが目をさました。このままでは村が焼け野はらになってしまう!誰かあのモンスターを倒してくれ!

謎の竜の狩猟

討伐100000Z

捕獲500000Z

契約金10000Z

「げ!この謎のモンスターつてもしかして俺らが前惨敗したやつじゃねえの?」

「やめとこうぜこれ」

「嬢!このクエスト受けます!」

「は?何言ってるんだ?おい!やめろ!」

「なにいつてんだよ、リベンジするチャンスだぞ?今やらなくていつやるんだよ!今だろ!」

「この前歯が立たなかったの覚えてないのか？しかもその時とほぼ変わらない実力、装備で、また同じようにやられんぞ？」

「バツカだなー！ここで倒せば俺らの強さを皆にしめせるんだぜ！ほらいこうぜ！」

「…一人で行ってくれ」

不思議な飴

この小説での不思議な飴は自然回復力を高める効果がある。そして食べたあとに経験値をゲットするとレベルを1あげられる経験値が上乘される。

脳内思考がオーバーフロー(?)

「ま、まだ鎖は完全に壊れていないようだな！早くハンターきてくれえー！」

さつきからこいつは情けない声で叫んでいるが残念。俺にはとある目標があるんでね。

神の話だとおれは今上位個体の強さがある、いや上位個体程度の強さしかない。あのとときのG級個体と思うあのウラガンキンは俺の攻撃を余裕とは言えないが受けきっていた、そして攻撃も一瞬で見切られた。もしウラガンキンに勝てない俺のところにG級ハンターがきたらどうなる？まちがいはなく『GAME OVER』だ。ここはゲームの中ではなく、現実。現実では『CONTINUE』はできない。元いた世界だつて戻れたとしても記憶や体、顔、種なんて元のようにはならない、この世界にこれたのは神の恵みを受け取ったようなもの。だが次なんてない。死んだらTHE END。人生の終わりに相応しい『ENDING』を嫌でも見るだろう。この機会を無駄にはできない、この危険なMHの世界で生き抜くにはもっと力をつけなければならぬ。

だからこんなところでたまたましてる暇はないんだよ。

ん？なんで鎖をゆっくり溶かしてたか？静に音をたてずに外へ行くこうとしたから

で・・・でも思いつきり音がしました、はい。

鎖を無理矢理破つてやる

しんそく!

「うわあああ! 鎖が壊れたあああ! うわうわうわうわわわわわわ (ry
じゃあな!

なんで最初からこうしなかったんだ俺・・・

「ここか! 俺をボッコボコにしやかったあのモンスターのいる場所は!」

「くうくん (気絶)」

「あれ? どこ?」

やつぱりもうメガシンカ状態の保持やらなんやら色々特訓したほうがいいのか？今の状態ではG級モンスターに目を合わせただけで死んでしまいそうだなあ。

メガシンカの練習に付き合ってくれる上位モンスターさんはいませんか？
居るわけないよなクソっ

…メガシンカしてみよう…

あれ？どうやってめメガるんだっけ？…イメージだっけ…

スピード…俺ははやい…俺はレックウザだ弱いわけがないのだ…進化を越えろメガシンカ…

そもそも通常進化しない、削除オ！

…見ててください俺のシンカ！

見る奴がない、削除オ！

ブラボーブラボー、オオ、遂にイメージできなかつたゾ、無限の力を持つメガシンカ…

却下、自分で諦めてどうする、削除オ!

想像力が足りないよ

本当にその通りかもな、削除オ!

ああ! どうすんだよ! いつまで駄文続けて文字数稼ぐつもりだよ!... いつでもメガシンカ出来るって言う事だけどもメガシンカする方法が分からん! いつでもだから戦闘以外でもできるはずなんだがなあ...